

## 表1 出題問題の検討

### 不適切問題

| 問題  | 検討内容   |
|---|--|
| <p>午後 6</p> <p>妊娠期にみられる女性生殖器の変化で正しいのはどれか。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 外陰部の色素沈着は増加しない。</li> <li>2. 子宮頸管は妊娠後すぐに粘液で塞がれる。</li> <li>3. 妊娠黄体は分娩までプロゲステロンを分泌する。</li> <li>4. 妊娠末期から Braxton-Hicks 〈ブラクストン・ヒックス〉収縮が子宮に出現する。</li> </ol> | <p>本問は妊娠に伴う母体の生理的変化に関する知識を問う設問である。選択肢 1 は「外陰部に色素沈着が出現する（標準産科婦人科学第 5 版、医学書院、2021、p360）」ことから誤答肢である。選択肢 2 は、「頸管粘液は妊娠末期に濃縮し、粘液栓を形成する（プリンシプル産科婦人科学 2 産科編第 3 版、メディカルビュー社、2014、p93）」ことから誤答肢である。選択肢 3 は、妊娠黄体は妊娠末期まで存在するが、プロゲステロン分泌能は妊娠 7～9 週までである（標準産科婦人科学第 5 版、医学書院、2021、p55）ことから誤答肢である。選択肢 4 の Braxton-Hicks 収縮の出現時期については、「妊娠中期以降出現し、その頻度は末期に向けて増加する（標準産科婦人科学第 5 版、医学書院、2021、p360）」、「妊娠初期には不規則な子宮収縮があり、軽度の痙攣として知覚されることがある。妊娠第 2 三半期ではこの子宮収縮は両手で触知できる。（ウィリアムス産科学原著 25 版第 2 版、南山堂、2019、p58）」と記述されており、「妊娠末期から出現」とは記述されていない。したがって、正答肢がないため、不適切問題とした。</p> |

### 課題のある問題

| 問題   | 検討内容   |
|--|--|
| <p>午前 15</p> <p>A さん（25 歳、初産婦）は妊娠 13 週で妊婦健康診査を受診し、子宮頸管のクラミジア検査を受け、結果は陽性だった。A さんへの助産師の説明で適切なのはどれか。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 「治療は抗菌薬の点滴になります」</li> <li>2. 「治療効果は採血検査で分かります」</li> <li>3. 「治療効果の判定を 1 週間後に行います」</li> <li>4. 「治療効果の判定まで性交時にコンドームをつけてください」</li> </ol> | <p>本問は妊娠初期の性器クラミジア陽性妊婦への対応を問う設問である。産婦人科診療ガイドライン産科編 2020、p295 によれば、治療薬としてマクロライド系経口抗菌薬が推奨されている。性感染症診断・治療ガイドライン 2016、p61-62 には「血清抗体検査では治療判定はできない。投薬終了後 3 週間以上あけて治療判定を行うことが望ましい」と記述されている。したがって、選択肢 1、2、3 は誤答肢である。消去法により残る選択肢 4 を正答とすることはできる。しかし、精液には子宮収縮や卵膜を脆弱化させる物質が含まれており、コンドームを使用しない性交は流・早産の原因となり得る。そのため、妊婦にはコンドームの使用が推奨される（助産学講座 6 助産診断・技術学Ⅱ [1] 妊娠期 第 6 版、医学書院、2022、p256）。「治療効果の判定まで」と限定せず、「性交時にはコンドームをつけてください」という記述とすることが望ましい。</p> |

| 問題   | 検討内容  |
|--|---|
| <p>午前 47</p> <p>次の文を読み 47～49 の問いに答えよ。</p> <p>A さん (38 歳、1 回経産婦) は妊娠経過中、特に異常の指摘はなかった。妊娠 37 週 2 日、妊婦健康診査時の胎児心拍数陣痛図で胎児の遷延性徐脈を認めため緊急帝王切開術で B ちゃん (女兒) を出産した。帝王切開の手術中、羊水混濁は認めなかった。</p> <p>B ちゃんは出生時、自発呼吸がなく筋緊張も低下していた。すぐに蘇生の初期処置を行ったが、自発呼吸は出現せず、聴診で心拍数 40/分のため出生後 1 分からバッグマスク換気にて人工呼吸を開始した。その後、有効な換気ができていることを確認しつつバッグマスク換気を継続したが児の心拍数上昇が認められず、胸骨圧迫を行うことにした。</p> <p>胸骨圧迫の手技で正しいのはどれか。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 一本指法</li> <li>2. 両母指法</li> <li>3. 片手法</li> <li>4. 両手法</li> </ol> | <p>本問は新生児蘇生法における胸骨圧迫の手技を問う設問である。選択肢 3「片手法」は幼児から学童、選択肢 4「両手法」は学童から成人におこなわれる胸骨圧迫の手技であるため、誤答肢である。選択肢 2「両母指法」が正答である (新生児蘇生法テキスト第 4 版、メディカルビュー社、2021、p98-99)。知識があれば選択肢 2 を解答できる。しかし、選択肢 1 の「一本指法」という手技および名称は新生児蘇生法においては存在せず、実在するものとの誤解を招く懸念があり、適切ではない。</p>   |
| <p>午後 11</p> <p>A さん (28 歳、初産婦) は妊娠 38 週 0 日、身長 160 cm、体重 66 kg (非妊時体重 55 kg) である。児は頭位で回旋異常はない。児の推定体重は 2,800g。分娩の進行状態と呼吸法の誘導の組合せで適切なのはどれか。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 子宮口全開大、肛門圧迫感はない。---- 陣痛発作時に努責を促す。</li> <li>2. 児頭が排臨し抑えきれない努責感がある。-- 努責しないよう促す。</li> <li>3. 児の後頭結節が恥骨弓下を滑脱する。--- 陣痛間欠時に努責を促す。</li> <li>4. 児頭が発露し第 3 回旋する。---- 短息呼吸を促す。</li> </ol>  | <p>本問は分娩第 2 期の呼吸法に関する知識を問う問題である。努責・呼吸法の誘導について、「子宮口が全開大し、努責感が出現しはじめたときに、努責誘導を開始する (助産学講座 7 助産診断・技術学Ⅱ [2] 分娩期・産褥期 第 6 版、医学書院、2022、p95)」と記述されていることから、選択肢 1、2 は誤答肢である。同書籍 p97 に「後頭結節が恥骨弓下を滑脱する前後で、産婦に短息呼吸への切りかえを促すとともに、ゆっくりと第 3 回旋を促し、児頭の娩出方向を調整する」と記述されていることから、「陣痛間欠時に努責を促す」とする選択肢 3 は誤答肢である。以上の消去法により選択肢 4 を正答として導き出せる。しかし、選択肢 4 の「児頭が発露し第 3 回旋する」は選択肢 3 の「児の後頭結節が恥骨弓下を滑脱する」を包含している。重複する内容の選択肢は適切とは言えない。さらに「発露」については、初産婦の場合、児頭の発露時に短息呼吸を促すのは一般的ではなく、著しく強い共圧陣痛により児頭の下降が急速である際等の対応の一つであるため、状況設定文中に同情報が記述されていることが望ましい。</p> |